



第35回 IC 国際フォーラム 2013  
The 35th IofC International Forum  
～調和～  
From Inner Harmony to Global Harmony

## 2013 年の学校訪問プログラムについて

本年の学校訪問では、初めての来日となったケニアのエスタさんとチベットのジャンさん、そして、インドネシアのヨーさん、更に日本人の森ゆうきさん(上写真左から紹介順通り)という4名のチームで、5月7日から7月7日の2ヶ月の間に東京都、静岡県、小田原市、福島県、北九州市、福岡市、佐賀県、広島市、名古屋市、岐阜県、つくば市の幼稚園から大学まで36校を訪問し、58回のプレゼンテーションを行い、約5,000人の生徒・学生さんたちと交流を重ねました。各国の文化紹介を行う国際理解の促進と、寸劇やICのメッセージソングやメンバーのチェンジの体験の紹介等から成るこころの教育という、今まさに社会的要請の高い2つの要素から成るプログラムは訪れた各校で好評を得ました。

チベットのジャンさんの、「8歳の時に険しいヒマラヤ山脈を90日余りを掛けて越えてインドに亡命して以来、20年近く恋しい家族と会えないでいる。家族がいることが当たり前と思わず、今の状況に感謝して欲しい」、との言葉は、多くの子供たちの心に沁みたまうでした。又、ケニアのエスタさんは、16歳の時、国での部族間の紛争から命を失いかけたという体験を語り、そのようなことが二度と起こらないように、今、異なった部族同士に融和をもたらすためのケニアのICの活動に参加していると話してくれました。インドネシアのヨーさんは、小さい時から様々なアルバイトをして家族を経済的にサポートするなど苦勞をしながらも、お母さんの「他人にしてあげたことは直ぐ忘れてしまいなさい、しかし、他人から施された親切は決して忘れてはならない」という言葉を大切に生きてきたと話してくれました。森君は高校生の時にカナダ、そしてニュージーランドへの留学をし、引っ込み思案だった自分の性格を変えるために頑張った経験話してくれ、人前に出て話すのは苦手という多くの生徒さんたちを勇気づけました。

ある学校では、日本の嫌いなことは何かとの、このグループからの質問に対し、小学校5年生の女の子が皆の前に立ち、泣きながら「私は学校でのいじめをなくしたい」と訴えました。又、各校で家族の融和をテーマにした寸劇を行った後、「今日帰ったら、家族や周りの人たちに何をしたら喜んでもらえるかを考えましょう」という質問をし、静かに考えてもらう時間をもちました。

「時どきお母さんやお父さんがけんかをして不機嫌になるときがあるけど、どうしていいかわからずそのままにしてしまいます。そんな時にこのげきのことを思い出そうと思います」と自分が仲直りのきっかけを作る役を果たしたいといったように、この劇で家族の関係を考えさせられたという感想文も多く寄せられました。又、「日本が恵まれている国であると改めて思った」、「日本以外の国のことをもっと知らなければと思う」、「自分としっかり向き合い、心の障壁をみつめて、なくしていきたい」、「他人任せをやめて、自分から行動します」、「最近始めたボランティア活動が辛くて辞めようかと迷っていたが、今ある環境に感謝して続ける決心をした」など、多くの気づきや決心が感想文に記されました。



▲静かになって家族に何が出来るか考えている子供達



▲国の文化紹介の様子、子供達の視線は釘付けでした



▲訪問先の教職員の方々と



▲プログラムは歌ではじまります



▲国際色豊かな高校生たちと



▲家族について考える大切さをスキットを通じて伝えます

## 第 35 回 IC 国際フォーラムを開催

去る6月28日から30日まで、「調和 From Inner Harmony to Global Harmony」のテーマの下に開催された第35回IC国際会議は、日本在住の各国からの留学生等を合わせ11か国・地域の、小学6年生から80代までの81名が参加しましたが、特に青年の参加者が一際目立ちました。

韓国から来日したチョン・ヨンヌク氏(IC専従者)、学校訪問のメンバーだったチベットのジャン、ケニアのエスタ、インドネシアのヨーの3名が深い経験をシェアしてくれた全体会議を始め、少人数でそれぞれの人生を語り合う『ファミリーグループ』の集まり、ゲームを通して文化や考え方の違いを学ぶセッション、各国の人たちの歌や踊りや手品などで盛り上がった『文化の夕べ』などに加え、自分自身を深く見つめるための『静かな時間』等でプログラムは構成されました。

参加者からは、「最初、会議の様子がよくわかりませんでした、時間が経つにつれ、全体のフレンドリーな雰囲気を感じてくれました。国、年齢、業種、様々な『違い』を越えて心を寄せ合おう、そうすることで世界平和につながっていく・・・という大きな主旨が最後にはわかり、素晴らしい会議だと思いました」、「プログラムを大いに楽しみましたが、もっとも意義深かったのは『ファミリーグループ』の集まりの時間でした」、「全てのプログラムが意義深かったですが、参加者個人の話の聞き、文化の違いを学ぶことが、お互いを理解し、思いやることが何故難しいのかを如実に示してくれ、自分にとっては一番役立ちました」、「会議に参加した直後より、会議を終えた今、自分が少し良い人間になれた気がします」といった感想が述べられました。





## 第10回東北アジア（日中韓）青年フォーラム開催

去る8月12日から17日まで、韓国MRA/ICの主催により「青少年のための韓・中・日の進路教育を考える」のテーマの下に、

第10回東北アジア（日中韓）青年フォーラムが開催されました。▲日本からの参加者達

日本からは、14大学から19名が参加し、中国からの24名、韓国からの30名の学生たちと熱心に交流を行い、参加者同士に深い友情が築かれました。日本の参加者の感想を紹介します。

<span> </span>	<span> </span>	<span> </span>
<span> </span>	日中韓東北アジア青年フォーラムに参加して	<span> </span>
<span> </span>	佐竹 優輝	<span> </span>
<span> </span>	関西学院大学 国際学部 2年	<span> </span>

記念すべき10回目となる日中韓東北アジア青年フォーラムに参加させていただきました。これまでドイツでの留学経験があった私にとって、アジアの国を訪れるのは初めてのことでした。フォーラムに参加するまでは、巷で騒がれるような情報を多く目にしたこともあり、あまり韓国、中国に対してよいイメージを持つことが出来ていませんでした。しかし今回の滞在を通してそのイメージが覆っただけではなく、これからの日中韓の関係の更なる向上を期待することが出来ました。何より、これらの国々に友人を持つことが出来、彼らの国に対して悪いイメージよりも良いイメージを見出すことが出来るようになりました。ディスカッションやフィールドトリップをはじめ多くの時間を彼らと共に過ごし、多くのことを学べた気がします。学びを共有できただけでなく、文化公演などを通してより彼らを身近に感じ、友達として関わり合うことが出来たと思います。

特筆すべきことは、8月15日、光復節と呼ばれる日に韓国に滞在できたことが私にとって大きな収穫であった気がします。至る所に国旗が立ち並び国の復興を祝う様子が肌で感じられ、日本人の持つ「愛国」との大きな隔たりを感じました。韓国や中国の学生は日本人が思う以上に自分の国を愛し、家族を愛し、友人を大切にします。私たち日本人は、全体で見ると、あまり国も家族も愛することが出来てはいないかのようになります。徴兵もなく、戦争の恐れも少なく、平和を享受することが出来ている私たち。隣国である韓国の彼らには、私たちにはない何かを持っている気がしました。このようなフォーラムには、未来につながる何かがあるような気がします。一般に緊張関係にあるとされる国どうしの若者を集め、交流をし、友人関係を築き、平和な関わり合いをもたらす。このたった5日という間の交流でさえも、10年後、20年後の日本と韓国、中国との関わり合いに大きな好影響をもたらすのではないかと感じています。私自身、これからの彼らとの関係がどのように発展していくのか、本当に楽しみであります。親日的な人が集った今回のフォーラム、本当に日中韓の3か国が緊張関係にあるのか疑問に思うほど私たちは仲良くなることが出来ました。

今回の滞在を通して、私はアジアがいつの日かEUのようになり、国境を越えて人の流れ、モノの流通が加速し、戦争や紛争とは縁遠い世界が訪れることが出来るのではないかと思うことが出来ました。何より、誰も争いなど望んではおらず、平和な日常が訪れることを願う人たちの方が多いという事実に改めて気づくことが出来ました。多くの人が望む平和、きっと私たちの世代のうちにできるはず、私たち一人ひとりが意識して、平和を希求していこうと強く決意することが出来ました。人生が変わった5日間、この素晴らしいフォーラムを企画・開催していただいて、本当にありがとうございました。



第10回 東北亞 青少年 FORUM
歡 青少年을 爲한韓·中·日 進路教育 迎



▲日本からの参加者達

## 第19回アジア・太平洋青年会議（APYC）が開催される

去る8月17日から24日まで、第19回アジア・太平洋青年会議が北朝鮮と国境を間近にする、韓国のDMZ Peace-Life Valley（非武装地帯 平和・生命の谷 センター）で開催されました。『より良い未来のために共に行動を Common Action for a Better Future 』のテーマでのこの会議には、アフガニスタン、ブータン等、14か国・地域から60余名が集まりましたが、日本からは、大学生・社会人から成る8名の代表が参加しました。豊かな緑の中に平和と生命をテーマとして建てられた会場は正にこのテーマに相応しい場所でしたが、センターにほど近い北朝鮮との国境沿いにある統一展望台と北朝鮮軍によって掘られた第4トンネルの見学に訪れた際には、その厳しい国際政治の現実も突きつけられました。

1週間に亘ったプログラムですが、朝は自らの心の声に耳を傾けるセッションから始まりました。「これまで自分の心を誰かに傷付けられたことがあるだろうか、逆に自分がこれまで誰かの心を傷付けたことはないだろうか」、「これまで自分がお世話になった人たち、或いは自分がお世話した人たちとのバランスシートを考えてみよう」、「自分の人生の目的はなんだろうか？」等々、何人かの正直な体験を聞いた後、静かに自分のところにこれらの質問を問いかけ考えました。

その他にも、「人間関係や国と国との関係」、「平和と命」、「持続可能な社会にするための生き方（環境問題）」、「民主主義と各国の問題点」等を講師の講演を聞き考えた全体会議もありました。又、小さなグループに分かれて深い話し合いを行った「ファミリーグループ」は、国や人種の壁を越えて、本当の家族になったかのような深い絆を生みました。その他にも、「リーダーシップ」、「ダンス」、「韓国伝統文化」、「ゲーム」、「歌」、「アート」等、様々なことを学べるワークショップへの参加、ゲームや各国の文化紹介の夕べ、キャンプファイヤー、緑に分け入るハイキングなど楽しいプログラムも多数用意され、あっという間に時間が過ぎていきました。

閉会式では、自らの内省を通しての多くの気づきから、「家族に愛と感謝の気持ちを伝える」、「無視していた親せきの人に謝る決心をした」、「差別等難しいこともあったが、自分たち中国人をフィリピンの人たちは寛大に受け入れてくれた。中国人とフィリピン人の過去の傷を癒したい」といった決意が参加者から述べられました。又、日本の参加者と韓国や中国や台湾の参加者との夜遅くまで続いた率直な話し合いに刺激され、カンボジアへのベトナムからの不法移民の問題等を苦々しく思い、最初の日には挨拶も交わさなかったというカンボジアの人たちが隣国ベトナムの参加者たちと真摯に話し合うということも起きました。カンボジアの青年は、「ベトナムを憎んでいた人間が、この1週間のAPYCでベトナム人の友人を作り変わることができた。歴史を学び合い率直に話し合うことが本当に大切だと実感した」と話してくれました。また、日本の参加者の韓国の人たちの負った心の傷への真摯な謝罪も多くの人たちの心に響きました。

1週間のAPYCの終わりには参加者が文字通り一つのワールド・ファミリーになったような深い連帯感が生まれました。

## スイス・コー（Caux）国際会議 2013

本年も『人間の安全保障のためのコー・イニティアティブス』という総合テーマの下、6月29日から8月12日まで7つのテーマで国際会議が開催され世界中から参加者が集まりました。日本からは、8月7日から12日まで開催された、『より良い世界のために―一人ひとりのチェンジのためのインスピレーションを求めて』のテーマの会議に10名が参加しました。参加者からの感想をご紹介します。

「コーの地に立てばわかるから行ってきなさい」

<span> </span>	<span> </span>	<span> </span>
<span> </span>	松下 真由美（通訳者）	<span> </span>

国際MRA（現IC）日本協会名誉会長であられた相馬雪香先生は生前そうおっしゃっていたそうです。多くの人が目を輝かせて話すスイスのコーという場所。通訳者の私にとっては憧れの通訳者、原不二子先生（原先生は相馬先生の娘さんで、株式会社ディプロマット代表取締役でもあります）が同時通訳者デビューされた記念すべき場所でもありました。その地に自分が立てる幸運に感謝の思いが溢れ、期待に胸を膨らませながら様々な歴史の舞台になったコーのお城に私は一歩足を踏み入れました。

お城の内部は光に溢れた広い回廊が長く、長く続いていました。そして両壁には現代風の絵画が飾られ、床には年期の入った丁度品も鎮座していました。素晴らしい物が普通の顔をして存在している所。それがコーという場所でした。

滞在中、様々な充実したスケジュールの中、アンティーク調の落ち着いた美しい個人部屋から、広大なushman湖とスイスの山々が静かにたたずむ窓の外に向かってふと目を向けると、静かな太陽の光が恵みの陽を、農地に、湖に、明るく、強く差し込んでいます。その光は決して慌てることも、逃げることもなく、悠々と静かに、大きく人々を暖め続けていました。

私はこのコー滞在中、そして出発前から多くの、多くの愛を多くの人から受けました。6月日本で開催されたIC国際フォーラムで、また準備中にICの方々から。コーの地で東日本大震災の被災地支援の様子を分かち合う準備をする中でプロのスピーチ指導者やそのスタッフの方々から。コーに送り出してくれた通訳学校の原先生を始めそのスタッフの方々から。そしてもちろんいつも応援し、私のために祈ってくれる家族や友人から。さらには現地のICスタッフや参加者の方々、そして私の好きな物を次々に与えてくれる神様から。それらのたくさんの愛、大きな愛はゆっくりと私の心に暖かい変化をもたらしていきました。

参加者の中でもそのような体験をした方がいたそうです。以前コーの大会のワークショップで開催された日本の習字を通して日本人の優しさに触れて、別人のようになって帰って来た、とその少女のご両親が感謝を込めて今回私に話してくれました。

今回の大会でも、プロの画家だったというフランスの女性が同じような日本のワークショップに参加され、最終日に皆の前に出て感想を話す際に「日本のグループの習字の技術と優しさに心打たれた」とわざわざ話していました。

また小さなグループに分かれて話しをする中で、自分自身大変な経験をし、今、他人のを助ける方々が惜しげもなくご自身の体験を正直に話してくれました。「こんな経験をしたらもうこんな風に生きるように運命づけられている、と言う人に言いたい。どんな神様を信じているのだ、と。」とでも力強く、また上からでも下からでもない、同じ所まで降りてきてくれている分ち合いを感じました。その中では国も年齢もそれまで経験してきたことも関係ありませんでした。皆が今の自分のありのままの姿でそこにいながら、他の人の、貴重な魂からの思いを両手で大切に受け止めていました。

プログラムにあった「文化の夕べ」では、日本チーム皆でソーラン節と炭坑節を会場の皆を巻き込みながら踊り、楽しく、笑いに溢れた時間を持つことが出来たことも良い思い出です。

私たちが参加した大会のテーマは「より良い世界のために―一人ひとりのチェンジのためのインスピレーションを求めて」でしたが、その中でまた被災地支援に関するお話をさせていただく機会がありました。日本が東日本大震災を通して経験したこと、苦しみの中でも世界中、と日本からのボランティアが復興のために力を尽くしたことをお伝え出来ました。当初、私は原発については良くわからないので触れないつもりでした。しかし、友人から「ヨーロッパで日本の震災といえば原発だよ」と教わり、映画を見たり、インターネットで調べたり、実際に原発被害で苦しんでいる方と連絡を取ったりしました。その中で原発近くにいるお母さん達（いわき初期被曝を追及するママの会）が今もどんなに苦しんでいるかを知るようになりました。どうにかして励ましたいと思い、お母さんの一人に、「今度スイスでこんな話をします、お子さん達の現状を訴えるために何か写真は無いでしょうか」と、お聞きしました。そのお母さんは真摯に「自分たちは現状を伝えるために子供達を写真におさめることはしていない。このことはわかる人は一言聞けばわかるし、わからない人にはいくら説明してもわからないです」と返事がきました。自分がどれだけ苦しんでいる人のことをわかっていなかったのかショックを受け、反省しました。

<span> </span>	<span> </span>	<span> </span>
<span> </span>	コーに参加したことをきっかけに様々な貴重な経験や学びがありました。「主は助けを求める人の叫びを聞き、苦難から常に彼らを助け出される」聖書よりこれからも信じて祈り、出来ることをし続けようと思いました。	<span> </span>

<span> </span>	<span> </span>	<span> </span>
<span> </span>	コラム 出来ることから始めよう	<span> </span>
<span> </span>	山本 愛（大学職員） <p>昨年の夏に参加した第18回アジア太平洋青年会議（APYC）をきっかけに、絶対にやりたいと思っていた「留学生交流会」が、去る5月9日に実現しました。私の勤めている大学には、中国、韓国からの留学生が多く、うちの学部には約100名がいます。しかし、日本人学生と留学生との交流があまり生まれていないことが課題になっていました。昨年のAPYCでの韓国人の女の子の会話をきっかけに、自分たちの世代の交流が、とても大事だと強く思うようになりました。その女の子のおばあさんは、今でも、日本人の男性は「怖い」と思っているそうです。何故かというと、そのおばあさんの友達が、戦争時代に従軍慰安婦として日本の男性の赤ちゃんを妊娠したあげく、中絶、そして、その女性も亡くなったそうです。「そんなことが昔あったことを、日本人は知らない。そういうことを、きちんと日本人に伝えたい。だから自分は日本に来た」と、その子は言いました。その時代の慰安婦たちの写真を、その場にいた日本人の女の子たち、韓国人の女の子たち、皆で見ました。見ながら、その場にいた私を含め、日本人の子たちは、泣いていました。写真でみたら、胸が張り裂けそうになるほどのむごい経験をした人が居て、まだその経験が、「日本への恐怖」としてその子のおばあさんの心に残っている。そういう「心の傷」が、実際にまだ存在することを、これほど痛感したことはありませんでした。そんなおばあさんの気持ちを知らなかったことが、悔しかったのです。その女の子は、最後にこう言いました。「韓国に帰ったら、韓国のおばあさんに、今日、こうして日本人と会話したことを伝えたい。又、韓国のメディアも、偏った情報を流していると思った。メディアで見た日本人は、そんな事実はないと拒否する人ばかりだった。でも、今日あなたたちを見て、そういう人ばかりでないということが分かった」と。彼女の言葉を聞いて、自分たちの世代の「交流」、「会話」から生まれる「共感」が、過去の人を癒すことになる、そう思いました。そして、歴史の話をするときに大事なのは、ある事柄が歴史的「事実である」とか「事実でない」とかを明らかにすることよりも、実際にその体験をした祖先が、その子孫たちが、感じていることを「痛感」、「共感」するということだと思いました。そのために、自分が今できることが、大学での「留学生交流会」でした。学部としては、初めての試みや、提案した当初は、「そんなことしても、人が集まらないんじゃない？」という意見もありました。しかし、不思議と不安はありませんでした。集まる人が少なくても、やる価値があると確信していました。そして、当日、韓国15名、中国20名、日本20名、台湾、タイ、マレーシアから各1名の学生が参加してくれました。みんな、本当に楽しんでくれました。「留学生と話したかったけど、出会う機会がなくて困っていたんです」という日本人学生、「日本人がこんなに参加してくれて嬉しい。留学生には興味がないと思っていた」という韓国人学生、「こんな交流の機会が欲しかった」という声をたくさん聞きました。交流会の閉会の挨拶の時、何故、こんな交流会をやりたいと思ったのか、このAPYCでの経験を、学生たちがどんな反応をするか少し怖かったけれど正直に話しました。「いろいろな政治家たちの会議はキャンセルになっているけれど、この交流会は、キャンセルにならなかった。それは、みんなに純粹に『交流したい』という気持ちがあったから。学生の皆さんが交流することは、今の時代にとって、過去の人たちにとって、そして未来の人たちにとっても、とても価値があること。そのことを胸に、これからの大学生活を過ごして欲しい」と。驚きました。いろいろな学生が、交流会終了後に私のところに来て、声をかけてくれました。「感動しました」、「そこまで理解していたんで、感謝します」、「山本さんの涙に力をもりました」、「入学してからのもやもやが、解消されました」、「日本人として、これからの留学生との関わり方を、見つめ直しました」など。やってよかったと心から思うことができました。こんなことが実現できたのは、学生時代のInternational Houseでの経験や、コンビニートで大勢の人前で話す度胸と自信をつけたり、APYCで、「今自分ができることを、今することこそが、リーダーシップをとるということ、小さな行動が、変化に繋がる。You can be the change. You can be the change.」ということを学び、体感したからです。これまでの自分の経験に感謝しました。すべてのことに意味がある。本当にそのとおりだと思います。これからも、自分が今、できることを、やっていきます。インドのシダースの言った「Conversation is powerful. 会話には、力がある」、同じくインドのリアの言った、「People tend to underestimate their action, but one small action can make a change. Believe that<span> </span>! 人って自分の行動をたいしたとないって思いがちだけど、ある一つの小さな行動が変化を起こすことって、あるのよ。それを信じて」。APYCで出会った人たちのこれらの言葉が、今の私の「勇氣」になっています。</p>	<span> </span>
<span> </span>	@編集後記 異常気象と言われた暑い夏は、多くの方々に熱射病をもたらしただけでなく各地に集中豪雨による大きな被害等も発生させました。最近では各地での竜巻で大きな被害が起きています。被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。そのような中で2020年のオリンピック東京開催が決まりました。国際公約となった福島原発の汚染水処理を始め、オリンピックの開催まで福島での問題解決と復興を目指し、国民が一致団結して取り組んでいくことを示すことが世界から期待されていることではないでしょうか。そのためにも私たち一人ひとりの日々の生き方が問われています。ICの言う「自分の在り方が国の在り方」を胸に刻みたいと思います。（編集委員：岡本 さくら、長野 清志、弓場 陸）	<span> </span>